

# 「家がいいね」 第51号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2008. 8. 15

## ひとりごと

勤務医を終える際に、歩き遍路の夢があった。しかし開業準備の慌しさが押し寄せ、他の目論見と共に諦めた。そして6年経った。よく続けられたと思うのは、医者を辞めようかと思った事が過去2回あるからだ。最初の危機は医者修行を始めた半年でやってきた。病院で亡くなる人にかける言葉が何も見つからなかった。再入学の医学生6年をそれなりに頑張って現場に出ながら、役に立たない自分だ、と途方に暮れた。どうしようと思った1982年、ある本が語りかけて来た。

### 「死の中の笑み」

2歳年上の徳永進医師が、鳥取日赤の勤務医として働きながら、患者さんや家族の生活に正面から向き合っている日常が書かれており、「あなたも、それでいいから」と言ってくれる声が聞こえた。「この本をまとめ買いし、拙い自分の代弁として、気持ちを分かってくれそうな人を見つけては手渡した。少しずつ自分の道が見え始めて、2年間の研修は終わった。」



書かれており、「あなたも、それでいいから」と言ってくれる声が聞こえた。「この本をまとめ買いし、拙い自分の代弁として、気持ちを分かってくれそうな人を見つけては手渡した。少しずつ自分の道が見え始めて、2年間の研修は終わった。」

### 鳥取、野の花診療所へ

あれから26年。在宅ホスピスをめざす遠い道の途中で、課題や悩みがめぐる。お遍路ではないが先達の仕事を直接見る必要があると思う。旅の第1番札所は、やはり徳永さんの「野の花診療所」。6年前に、あえて採算困難な19ベッドの有床診療所として始められ、希望の火を灯し続けている。



患者さんが落ち着く7月24日(木)に思い立ち、朝1番の赤福を持ち鳥取に向かった。特急は肝を冷やす速度で中国山地を走り抜け、お昼前には診療所の玄関に立った。「百聞は一見にしかず」細い路地、隣り合う民家に地域の文化を感じ、生

活する家に病院機能を取り込んだような温かい診療所の雰囲気を感じた。これで帰っても、お遍路としては満足なのだが、ボランティアの三木さんに、食堂「ターラ」で昼食を取りながら話を伺う内に、自分が飛び込みの患者であっても、同じように扱ってくれるだろうとの確信が湧いてきた。

診療所には、事前連絡なしの突然の見学であるにもかかわらず、驚いたことに徳永医師が食堂に現れた。午前の外来診療、午後からの訪問診療の間の時間を縫い、病室訪問にも同行させて頂いた。街の中の診療所、疾患を限らずのホスピスケア、在宅療

養の一場の場であり、ボランティアを通じて地域にも密接に繋がっていると感じた。今まで見た何処のホスピスよりも、心配りに満ちていると感じ、短い訪問を終えた。私にとり、在宅で最期を終えることが困難な方たちに、どんな場を準備するか沢山のヒントを頂いた旅であった。(写真は当日のものではなく、関連のHPから引用させて頂きました)

### 9月の臨時休業です

伊勢市内の小学校運動会が、20日に予定されるため、ご配慮ををよろしくお願い申し上げます。

- 9月18日(木) 代替 開院
- 9月19日(金) 通常どおり開院
- 9月20日(土) 臨時 休診



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御園町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
mail [homecare@kr.tcp-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tcp-ip.or.jp)  
<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>